

高塚清一さん逝去

ボート界のレジェンド・高塚清一さんが3月1日、亡くなった。そのわずか2日前の2月27日まで多摩川を走っており、あまりにも突然の訃報にボート界は悲しみに包まれた。なお、死因などは公表されていない。

高塚さんは1965年11月に浜名湖でデビュー。5期目には5・89の勝率でA級に昇格してこの期からA級常連に。9期目の70年後期には7・34の自己最高勝率を残した。67年11月の桐生で初優勝。69年8月の常滑東海地区選でGI初出場。SGは69年に5回



の優勝を飾り、70年3月住之江鳳凰賞(現クラシック)に選考順位20位で初出場した。この大会は登録番号2千番台の選手が高塚さんだけなので最若手として出場。正式な記録は分らないが、登録2千番台で最速のSG出場者かもしれないほど出世は早かった。

父が競輪選手だったこともあり、当時から体格が良く重量級。当時は最低体重制限などはなく、男子でも40キロ台の軽量選手はたくさんいたこともあり、SG、GIの常連にはなりきれなかったものの、SGは7回出場した。最後のSG出場は90年の戸田ダービーだった。

ただ、その重量級の威力はランナ戦で発揮された。ランナ戦の名手と言えは香西豊の名前が真っ先に思い浮かぶが、大森健二や後の木下青海、納富英昭らに負けないランナ巧者だった。5回ほど開催されたGIIの「ランナー王座決定戦」でも優出があり、ランナ戦全盛期とも言える91年には高塚さんの自己最高となる約3190万円の賞金を獲得している。

級別制度が95年後期から変更されて以降もA1級が2期ある。07年後期からは11期連続でB1級に降格したもの、13年前期にA2級に復活し、3期連続でA2級をキープ。最後のA2級だった14年前期はすでに66歳だった。

最後の優勝は13年1月29日の常滑。65歳10か月での優勝は後に加藤峻二さんに抜かれるまでは最年長優勝記録。逆に20年7月12日に

津で1着の時は73歳4か月と5日で、加藤さんが持つ最年長1着記録を更新した。生涯最後の1着は今年1月29日の平和島。77歳10か月と19日の最年長1着記録は今後絶対に破られることのない記録と断言しているだろう。また、「令和6年優秀選手」では西島義則と共に特別賞を受賞した。

通算成績は出走回数1万3461走、勝率5・64、1着2398回、優出245回、優勝47回。生涯獲得賞金は約9億2638万円。ご冥福をお祈りいたします。

4期通算勝率の引退勧告を一時凍結

日本モーターボート選手会は4期通算勝率3・80未満の選手に対する退会(引退)勧告を、今期終了時点(4月30日)から06年3月以来、19年ぶりに凍結することを決定した。これにより勝率不足による選手の引退が一時的に停止する。今期末も15人前後の選手が勝率3・80未満で引退のピンチを迎える状況だった。

その背景には選手数の不足がある。開催日数の増加に加えて、途中帰郷の選手が増えてきており、追加あっせんを希望通りに行えないことが増えたため、競走会から選手数の増加を要望されたことに応えるための措置。

現在の規定選手数は1600人だが、これを1630人に増やし、追加あっせんをスムーズに行える

MACOUR
TOPICS

TOPICS

マクール トピックス

ようにする方針。諸事情によりレ
ースを走っていない選手（2年間
未出走）を除くと現在の選手数は
実は1560人なので、70人増や
すための凍結というわけ。ただし、
従来通りに4期通算の事故率が
0・70以上のケースや、4期の通
算出走回数が私傷病や自己都合が
理由で60走未満の選手に対しては
退会勧告が行われる。

実はこれまでも4期通算勝率に
よる退会勧告は凍結と実施を繰り
返してきた。勝率は3・80未満で
はなく3・50未満という緩い時期
もあった。

選手数が1630人を超えるの
は2年後あたりになると思われ
る。期末の時点で1630人を超
えた時は、4期通算勝率3・80未
満の順位から順次退会勧告が実施
され、それでも1630人を超え
ていた時は登録35年以上の選手で
4期通算勝率4・80未満の順位か
ら順次、退会勧告となる。これは
いわゆる「33年ルール」の発動だ。

級別の最低出走回数など 変更

選手会の引退勧告緩和に関連
し、競走会の方も安易な途中帰郷
の防止や、最近多発しているFに
対応するため、一部のルールが変
更される。

まずは途中帰郷防止策の一環と
して、「選手級別決定基準」の改正。
最低出走回数はA2級が現在の70
走以上から80走以上へ、B1級は

50走以上から65走以上へと変更。
A1級は90走以上のままで変更は
ない。

スタート事故防止対策として
は、2本目のFに対する事故点が
変更される。現状は1本につき
20点で2本切っても合計で40点だ
が、改正後は2本目のFの事故点
は30点。また、それが優勝戦だっ
た場合、現状の30点が一気に50点
となる。優勝戦でF持ち選手に対
する評価を下げざるを得なくなり
そう。

また、あっせんの運用も一部見
直される。それはB2級男子選手
に対するあっせん。B2級女子選
手は女子レースの開催状況により
地区に関係なく全国どこでもあっ
せんされていたのだが、B2級男
子選手は地元もしくは隣の地区に
しかあっせんされていなかった。
それを女子選手と同じく、隣接地
区以外にもあっせんが入るように
なる。

以上のルール改正は5月1日の
新学期から適用される。

三角哲男が通算V1000

3月9日の浜名湖マクル杯で
三角哲男が史上28人目となる通算
1000回目の優勝を飾った。現役
では17人目、58期では初。先頭艇
のFによる繰り上がり優勝ではあ
ったが、区切りとなる通算4000
回目の優出で見事に決めた。しか
も今年早くも3回目の優勝だ。



1000回の優勝のうち、SGは
1回、GIは3回。特筆すべきは
4コースでの強さ。記録がはつき
り残っている97年5月以降の84回
の優勝のうち、15回が4コース
からだった。

石川真二が2500勝 坪井康晴と室田泰史は2000勝

3月7日の浜名湖マクル杯4
日目3Rで6号艇からインを奪取
して逃げた石川真二が、史上46人
目となるデビュー通算2500勝
を達成した。90年5月に常滑でデ
ビューして以来、34年10か月、8
719走目での達成。

内訳はSG40勝、GI158勝、
GII9勝、GIII219勝、一般戦
2074勝。福岡支部では岡本義
則、田頭実、今村暢孝、日高逸子
に続く5人目、66期では初。

石川は24場制覇も達成しており
GIの1回を含む通算優勝は95
回。

また、3月5日の江戸川一般戦



石川真二

5日目9Rで室田泰史が189人
目となるデビュー通算2000勝
を達成した。91年11月に三国でデ
ビューして以来、33年4か月、7
936走目での達成。

内訳はSG5勝、GI141勝、
GII8勝、GIII121勝、一般戦
1725勝。福岡支部では今垣光
太郎、岩口昭三、石田政吾、武田
光史、平野小六、加藤元三に続く
7人目、69期では仲口博崇、田中
信一郎、都築正治、三嶋誠司、太
田和美、山本浩次に続く7人目。

室田はSG出場が4回。GI優
出は3回あるが優勝はなし。通算
では32回の優勝がある。

3月30日の浜名湖一般戦2日目



室田泰史

2月27日の唐津周年3日目4RでGIでは最高となる36万60円のビッグ配当が飛び出した。SGやGIIを含めても最高配当。これまでに30万円を超える配当は19年7月10日の常滑オーシャンカップ初日10Rで6号艇の濱野谷憲吾が提供した30万4770円の1回しかなかった。ちなみに2連単も30番人気の7万1370円だった。

唐津周年でGI最高配当

6Rでは坪井康晴が190人目となるデビュー通算2000勝。98年5月8日にデビューして以来、26年10か月、6640走目での達成。
内訳はSG169勝、GI551勝、GII49勝、GIII165勝、一般戦1038勝。静岡支部では12人目、82期では赤岩善生、中澤和志に続く3人目。
坪井はSG優勝3回、GI優勝11回、通算優勝76回。全24場制覇へ残すは鳴門だけとなっている。



坪井康晴

ただ、レースではアクシデントが発生。インから逃げた入海馨がまくり差して肉薄してきた山口剛をバックで締めた時に山口が転覆し、さらに吉田裕平が乗り上げて転覆。先頭を走っていた入海は妨害失格となって、バックでは2番手だった6号艇の桑原悠が1着に繰り上がった。

唐津周年で全艇F

3月2日の唐津周年最終日3Rで6艇全艇Fが発生した。

メンバーは1号艇から古賀繁輝、山崎郡、井上忠政、笠原亮、福島勇樹、寺田祥という顔ぶれ。4コースの笠原がコンマ09、5コースの福島がコンマ06の非常識なF。福島は今期2本目となる手痛いFでもあった。

記録が残っている96年以降でGIの全艇Fは峰竜太らが一員だった21年3月2日の浜名湖周年以来で4年ぶり2回目。この時は強風（向かい風）の安定板装着レースで、S展示より本番の風が緩んだことが選手のスタート勘を狂わせたが、今回は大きな気象条件の変化などはなかった。めったにFを切らない寺田が一員だったことも意外だった。

日高逸子がF2

3月11日の大村一般戦初日10Rのオール女子番組で、日高逸子が2コースから今期2本目となるFを切った。1本目のFは昨年12月28日の蒲郡クイーンズクライマックスシリーズ戦3日目8Rで切っており、このF休み明け初戦でのFだった。
日高は約40年のキャリアで通算48本目のF。決して多いタイプではないがF2は7回目、20年にF3になって以来。来期にかかるF休みは60日だけなので、出走回数不足によるB1級降格などは避けられそう。



竹井貴史が2日連続でF

3月13日からの福岡一般戦で初日ドリーム戦1号艇に指名されていた地元の竹井貴史が、2日目、3日目と2日連続でFを切ってしまった。即日帰郷となった。

ドリーム戦を制して気配も良く、シリーズリーダーの期待も高まっていたのだが、2日目の6

号艇1回乗りを6コースから01のF。3日目も同じく6コースから01のF。エンジンが出すぎていたのかもしれないが、Fを切った翌日のFは本当にもったいない。竹井のF2は21年後期以来で通算4回目。



秋山直之が窃盗容疑で逮捕される

ボート界に衝撃的なニュースが流れた。3月19日からの徳山MB大賞に出場予定だった秋山直之が、前検日前日の3月17日、山口県岩国市内の商業施設内で飲むヨーグルトとお茶（2点で308円）を盗んだ疑いで逮捕された。犯行現場を目撃した保安員が取り押さえ、駆けつけた警察に現行犯逮捕されたという。本人は「盗んだことに間違いはありません」と容疑を認めていると報道されている。

秋山の今後はどうなるのか。褒賞懲戒審議会と選手会の両方から出場停止処分が下されるのはほぼ間違いなが、それがどれほどの

期間になるのかは不明。出場停止期間は褒賞懲戒が最高で1年6か月、選手会是最長で1年。禁錮刑以上の刑が確定すると自動的にクビになってしまうルールもある。

今月の引退選手

2月末から3月にかけて次の2選手が引退した。

4037別府正幸(埼玉85期46歳)
5225斎藤 凜(埼玉129期23歳)

別府正幸さんは父と兄がオートレーサー。田村隆信ら銀河系の一員で99年11月に菅屋でデビュー。A1級には5回昇格しており、自己最高勝率は08年前期の6・89。GIには9回出場し予選突破は2回あったが優出はなかった。羽野直也はまな弟子。20年7月に福岡支部から埼玉支部へと移籍した。通算成績は5716走で勝率5・16、897勝、優出63回、優勝2回。生涯獲得賞金は約4億1737万円。現役最後のレースは



別府正幸

1月23日の大村。

斎藤凜さんは藤原碧生らと同期で実働3年。24年6月25日に江戸川でインから逃げて水神祭をマークしたが、これが選手生活の最初で最後の1着となった。現役最後のレースは1月15日の多摩川。

選手の負傷情報

宮田龍馬 2月18日びわこ一般戦3日目8Rの1周バックストレッチで他艇と接触してボートが浮き上がった際(不完了失格)に負傷。仙骨骨折で全治見込みは2か月だったが、約3週間後の3月10日戸田から復帰している。

山室展弘 2月26日びわこ一般戦2日目4Rの2周1マークター出口で他艇と接触し転覆。腰椎骨折で全治見込みは約60日。山室は昨年12月13日にも全治見込み2か月の右ひ骨骨折の重傷を負ったばかりで、このびわこが約3か月ぶりの復帰戦だったが、復帰2走目にしてまたしても重傷を負ってしまった。

西橋奈未 3月15日丸亀一般戦2日目12Rの2周1マークのター出口で落水したところを後続艇が避け切れずに接触。前頭部挫傷、頭蓋骨折、脳震盪で全治見込みは未定。西橋は自身でもSNSで発信。「頭蓋骨折と額を15センチ縫うケガ。幸いにも折れ方がよく、視力には問題なく、合併症を引き起こすこともない」とファン

に報告している。

褒賞懲戒の結果

2月26日に開催された褒賞懲戒審議会での次の5選手に出場停止処分が下された。

小林 甘寧 合計で3か月
島倉 都 2か月
天野 誠 2か月
櫻本あゆみ 1か月
小玉 啓太 1か月

小林甘寧は11月22日の徳山2日目6Rで6コースからFを切りながら、欠場・失格艇表示板を見落として途中で離脱することなくゴール。さらに12月17日の児島前検日、不注意により私物のペラ2枚を持ち込んでいたことによる整備規定違反。前者が2か月、後者が1か月の合計3か月の出場停止。島倉都は11月17日の多摩川5日目9Rでピットアウトの15秒後にエンストし、再始動もできず欠場。キャブレターの平小ネジの離脱が原因と判明し、整備不良による整備規定違反。

天野誠は11月25日の浜名湖4RでインからFを切ったにもかかわらず欠場・失格表示板を見落として先頭でゴールしてしまった。

櫻本あゆみは12月26日からのクインズクライマックスシリーズへの前検不参。来場途中に電車で忘れ物をしたことに気づき取りに戻ろうとし、前検に間に合わない

いと判断して前検に参加しなかった。

小玉啓太は1月12日からの蒲郡に出場予定だったが、新幹線で寝過ごしたことになる前検遅参。

深井利寿が50歳でSG水神祭

若松クラシックでSG出場が13年のオーシャンカップ以来、12年ぶり3回目だった深井利寿が、3月28日の予選最終日4日目8Rでインから逃げてSG初勝利。50歳7か月でのSG水神祭は歴代で2位の年長記録。

歴代1位は12年4月の下関マスタースCでGI初優勝し、翌13年3月の平和島クラシックがSG初出場だった井川正人。4日目6Rで2コースから茅原悠紀のイン戦を差し切って勝利した時の年齢は実に55歳2か月だった。深井もこのクラシックには出場しており、井川の水神祭を目の当たりにしたとか。50歳以上でのSG水神祭はこの2人しかいない。

この2人に続くのは47歳3か月



深井利寿

表4 オーシャンカップ出場権争い

順	登番	選手名	支部	得点
前V	4418	茅原 悠紀	岡山	47
優先出場	4238	毒島 誠	群馬	65
	4262	馬場 貴也	滋賀	51
	3941	池田 浩二	愛知	51
	4851	関 浩哉	群馬	47
	4444	桐生 順平	埼玉	22
直前SG(グラチャン)優勝者				
8	4686	丸野 一樹	滋賀	50
9	4166	吉田 拓郎	岡山	49
10	4320	峰 竜太	佐賀	43
11	3897	白井 英治	山口	42
12	4524	深谷 知博	静岡	40
13	4586	磯部 誠	愛知	38
14	4573	佐藤 翼	埼玉	38
15	4537	渡邊 和将	岡山	38
16	4459	片岡 雅裕	香川	36
17	4445	宮地 元輝	佐賀	36
18	4337	平本 真之	愛知	35
19	4024	井口 佳典	三重	35
20	4391	松田 祐季	福井	33
21	4503	上野 真之介	佐賀	33
22	4502	遠藤 エミ	滋賀	32
23	4504	前田 将太	福岡	32
24	3783	瓜生 正義	福岡	31
25	4682	大上 卓人	広島	31
26	4030	森高 一真	香川	31
27	4350	篠崎 元志	福岡	29
28	3942	寺田 祥	山口	29
29	4831	羽野 直也	福岡	29
30	3415	松井 繁	大阪	28
31	4205	山口 剛	広島	28
32	4362	土屋 智則	群馬	28
33	4500	山田 康二	佐賀	28
34	5121	定松 勇樹	佐賀	27
35	4719	上條 暢嵩	大阪	27
36	4450	平高 奈葉	香川	27
37	4685	島村 隆幸	徳島	26
38	4848	仲谷 颯仁	福岡	26
39	5084	末永 和也	佐賀	26
40	3719	辻 栄蔵	広島	24
41	4528	黒井 達矢	埼玉	24
42	4826	井上 一輝	大阪	24
43	4371	西山 貴浩	福岡	23
44	4290	稲田 浩二	兵庫	23
45	4208	三浦 永理	静岡	23
46	4324	海野康志郎	山口	22
47	3854	吉川 元浩	兵庫	21
48	4494	河合 佑樹	静岡	21
49	3716	石渡 鉄兵	東京	21
50	4095	福来 剛	東京	21
51	4415	下出 卓矢	福井	21
52	4886	入海 馨	岡山	21
53	4433	川野 芽唯	福岡	21
54	4123	細川 裕子	愛知	21
55	4914	吉田 裕平	愛知	20
56	4932	新開 航	福岡	20
57	4468	大池 佑来	東京	19
58	4013	中島 孝平	福井	18
59	4547	中田 竜太	埼玉	18
60	4397	西村 拓也	大阪	18
61	4344	新田 雄史	三重	18
62	4787	椎名 豊	群馬	18
63	4019	笠原 亮	静岡	18
64	4963	實森 美祐	広島	18
65	4590	渡邊 優美	福岡	18

若松クラシックでは深井利寿以外にもSG初出場だった奈須啓太

(初勝利)
3月13日 草川 壮良(滋賀134期)
3月15日 岩崎 麗子(群馬133期)
3月22日 樋江井 舞(愛知134期)
(SG初勝利)
3月26日 奈須 啓太(福岡96期)
3月26日 片橋 幸貴(滋賀109期)
3月28日 深井 利寿(滋賀81期)
(初優勝)
3月6日 佐藤 悠(福井118期)
(GII初優勝)
3月24日 堀本 和也(徳島111期)
(SG初優勝)
3月30日 佐藤隆太郎(東京115期)

今月の水神祭

の納富英昭、46歳10か月の木下繁美、45歳8か月の鈴木広機。女子では43歳4か月の香川素子が最年長。



片橋幸貴



奈須啓太

と片橋幸貴が水神祭をマーク。ただ、奈須は後半レースでFに散ってしまっただけ。新人の水神祭は3人。草川壮良は児島で6コースから差し、3連単は11万円台の大穴を提供。岩崎麗子は宮島ヴィーナスで4コースからの差し。樋江井舞は戸田の

徳山オーシャンカップ 選考順位

男女混合戦で5コースからのまくり差しを決めた。2期目の134期は樋江井が11人目。133期は岩崎が20人目で残るは7人となった。佐藤悠は11回目の優出だった江戸川で4コースからのまくり勝ち。新開航らの118期では11人目の優勝者になった。佐藤は下出卓矢の弟子で伸びべら軍団の一員。この江戸川でもチルト2度の伸び仕様で一撃を決めた。徳山のMB大賞を制した堀本和也は師匠が近藤稔也なので、菅章哉とは兄弟弟子という関係。片や伸びべらの第一人者なのに堀本はまるで真逆のピット離れ仕様を多用するタイプ。GIは18節走ってまだ優出はなく、GIIは7回目の出場で初優出初優勝。来年3月の蒲郡クラシックでのSG出場切符を手にした。

7月22日から徳山で開催されるオーシャンカップの出場選考期間は今月いっぱい。ボーダーの最高は18年の21点だが、今年は3月時点のボーダーがすでに21点。さらに上昇するのは間違いなくオーシャンカップ史上最高のボーダーになるのは確実な状況。3月末時点で21点は8人もいるが、そのうち吉川元浩はまだ3節GIが入っている。出場は濃厚。河合佑樹、石渡鉄兵、入海馨も2節入っており、途中帰郷しなければ23点になる。逆に4月がF休みの福来剛と下出卓矢、GIのあっせんがない女子の川野芽唯と細川裕子は厳しい状況。地元山口勢は白井英治と寺田祥が安全圏だが、期間内に優出が3回もあつて22点の海野康志郎はF休みでもないのに4月のGIあつせんがなく、かなりピンチ。地元のSG出場がかかっている状況で勝負させてもらえないのは、あまりにもかわいそうだ。